

水辺の国土史 —豊かな暮らしを創るエンジニアリング—

History of Japanese Waterfront Landscape
—Cultural and Ecological Life based on Engineering—

特集担当主査：田中尚人

特集企画担当：青木研一郎、川里麻莉子、坂本淳、澤村康生、中居楓子、村上亮

「飲水思源」とは、水を飲む者はその源に思いをはせよ、という中国の故事成語とされる。南北に長い日本列島の一級河川109水系は、235の流域に分かれるという。3000m級の山から海まで山性の変化に富んだ地形の日本列島は、高温多湿なアジアモンスーン気候に属し、四季の移ろいがあり梅雨の長雨や台風にも度々襲われ、主食としてきたお米の水稲栽培も、これらの地形や気候風土の影響を強く受ける。つまり「水は蛇口をひねれば出てくる」、「水はベツボトルを買う時代」となっても、人々の暮らしや食文化、生業や祭祀の基本的な単位は「流域」であることは間違いない。川の上流、中流、下流、どこに住もうとも、自分たちが今飲んでいる、利用している水は、どこに発しどのような経路でここに辿りついたのか、思いをはせることは可能である。

現代の日本では、これまでずっと増え続けていた人口が、21世紀初頭に減少に転じた。明治維新以降、伝統的な日本固有の土木技術に加え、欧米から移入された近代土木技術が組み合わせられ、現在、私たちが暮らす基盤であるインフラストラクチャーや社会シ

ステムが構築されてきたが、これらは人口増大、居住域拡大を前提としたものであった。私たちは、世界でも例に見えないような急激な少子化、これまで日本が経験したことのない高齢社会を迎える中で、縮退すべき都市機能や多様化・個別化する価値観や減少する人口に合わせて、適切なインフラストラクチャー、社会システムを構築していく必要がある。

世界では気候変動や民族紛争、なくならない戦争など、一方、地域では少子高齢社会における社会保障や医療問題、人口流出や過疎、地域文化の喪失、広がる格差など、課題山積の日本列島において、昨年度は特に多くの地域が河川に痛めつけられた。人々が河川や水辺を疎ましく思うのも分からなくはない。しかし水辺は、そもそも水域と陸域の両義的空間であり、その分断は私たちの暮らしの潤いを奪う。日本人は、水辺という境界領域を丁寧に観察し、川との間を大切に、私たちの生活を、そしてこの国の形をつくってきた。さまざまな技術革新やソーシャルイノベーションなど、新しい社会づくりの機運も高まりつつある。本当に日本の国土に必要な土木技術と



写真1 ピット先生と訪れた白糸台地 (2014年10月23日)



写真2
水前寺成就園の復興の風景 (2018年5月21日)

フランスの著名な地理学者で、風景とテロワール (Terroir: 風土、土壌・気候・地形などその土地の特徴) の研究者として名高いジャン・ロベール・ピット先生は、熊本県のある農村にて、地元の方が全てその集落で取れた材料で、その方自身がつくったお料理を食べられた後、集落を散歩されながら(写真1)「今、私たちが

歩いている風景は、全て食べられる。これが大切なことなのです」とおっしゃった。水路を流れる水、黄金に輝く稲穂、遠くには茶畑、集落のシンボルのイチヨウには銀杏の実がびっしり、私たちが毎日飲んでいる、この水はどこからきて、どのように流れ、どのように私たちの暮らしを成り立たせてくれているのか、を知ること。想像と暮らし、日常と非日常、あちらとこちらを、お互いの違いを認め合いながら、一緒に考える「アクチュアリティ (Actuality: 現実み、現実だと確信できるよりどころ)」を支えるエンジニアリングが、22世紀の国づくりに必要である。2016年4月、震度7の大地震に二度襲われた熊本地震からの復興において、名勝水前寺成就園の湧水を復活させようと、多くのボランティアの皆さんや地域の子どもたちと砂利上げをした際(写真2)、初夏の水は「確かに」冷たかった。

本特集では、できるだけ多様な執筆者をお迎えして、水辺を国土史として振り返り、想像することで、これからの暮らし、これからの世界とともに創っていくためのきっかけとなることを期待している。

は何か、またその土木技術が支える豊かな暮らしや文化が育まれる場所は、どこか。本企画では、私たちの命を源である水、その水が流れる川を中心とした水辺を舞台に、「水辺の国土史」を編み、これからの豊かな暮らしを創るエンジニアリングについて考えることとした。

1914年に社団法人として設立された土木学会では、20世紀に「日本土木史 大正元年〜昭和15年 (1965年発行)」、「日本土木史

昭和16年〜昭和40年 (1973年発行)」、「日本土木史 昭和41年〜平成2年 (1995年発行)」、「日本土木史 平成3年〜平成22年 (2017年発行)」の4冊の正史を編さんしている。

戦後まもなくの1950年代、いくつもの台風が来襲する国土の水辺には、最低限の安全性、シビルミナマムを実現する「治水」の確立が求められた。1960年代、高度経済成長を支える「利水」、1970年代、多様化

する価値観に対応し「省エネ」、「親水」などの言葉が生まれ、1980年代になると「景観・デザイン」や「癒やし」が求められ、1990年代、「多自然型川づくり」の導入、「環境」や「生態系」への配慮が求められるようになった。21世紀に入り、中央省庁の再編、激甚化する災害、低炭素社会の構築、高齢社会を迎えた全国各地で取り組まれる「地域創生」、多様なステークホルダーが参加する「かわまちづくり」など、水辺を取り巻く目に見える環境も、目に見えない環境も激変している。22世紀の水辺では、どのような言葉が交わされているのだろうか。

フランスの著名な地理学者で、風景とテロワール (Terroir: 風土、土壌・気候・地形などその土地の特徴) の研究者として名高いジャン・ロベール・ピット先生は、熊本県のある農村にて、地元の方が全てその集落で取れた材料で、その方自身がつくったお料理を食べられた後、集落を散歩されながら(写真1)「今、私たちが